

セフェリスにおける 連続のプロセスとしてのギリシア観 — 発想の転換のために —

志田 信男

§ 1. プロロゴス

E・キーリィ著、ヨルゴス・セフェリスとの対話⁽¹⁾を読み返していたら、何度も読み、もしかしたらその都度はっとして気に止めていたかも知れないのだが、今回特に注意を引いた個所があった。それは古典ギリシアあるいは古代ギリシアと古代ギリシア語に関するセフェリスの発言で、キーリィが、現代ギリシア詩人の古代以来の自国の伝統に対するかかわりについて放った質問に発している。ここでセフェリスの述べている回答は、私たちのギリシア認識にとって多くの示唆を含んでいるように思われる。ところで現時点でかりに私たち日本人にとってのギリシア的伝統もしくはギリシアとは何か、と問いかけた場合、おそらく多くの人々にとっては、古代ギリシア、それも古典古代のアテーナイを中心とするギリシア文化であろう。ギリシア神話、ホメロス、ヘシオドスの叙事詩、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの悲劇、アリストファネスの喜劇、ヘロドトス、ツキュディデスの歴史、プラトン、アリストテレスの哲学、ヒポクラテスの医学、サッポー、アルカイオス等の抒情詩 etc.etc.要するにかなり知的な教養人にとっても—というよりむしろ教養人であればあるほど古代ギリシアが中心であり、かりに現代ギリシアが視界に入ってくるとしても、古代を媒体としての観光地としてのギリシアであろう。大学における歴史の講義にしても、政治・文明史を軸とする世界史の中における古典古代のギリシアの偉大さ、サラミス海戦に象徴される東洋的専制対ヘラス的自由の勝利など西欧中心史観からの歴史認識が中心であろう。現代ギリシアともなれば、数百年にわたるトルコの支配から独立し、第一次世界大戦で領土を回復、現在は小規模の農業、海運業の他、主として観光立国している NATO 加盟の一小国、古代ギリシアとは全く別の一小国で、キュプロスにおける紛争や政権交代のニュースが時に新聞の片隅に報道される国ぐらいの認識が一般であろう。かって触れたことがあるよう

に、古典ギリシア語の専門家さえが、現代ギリシア語を指して、あんなものはギリシア語ではないよ⁽²⁾、などと放言する状況が現在でもないとはいえないのである。このような日本における現代ギリシアに対する認識の大状況下において細々と現代ギリシア語や文学に親しんでいるものにとって、この対話におけるセフェリスの発言は鮮烈なインパクトを与えてくれるものであった。いままで読み過ぎていたのが不思議なほどである。Greekdom とか Griechentum という語が存在するがこのような集約的な概念を想起させるに足るセフェリスの発言である。以下にこの対話の一節を引用して考えてみたい。

§ 2. 「対話」の当該個所の全文⁽³⁾

キーリィ

ギリシアの詩人のその特殊な歴史的伝統に対する関わりはどうでしょう？ あなたは、以前、ギリシアには古代ギリシアというのは存在しないといわれたことがあります。正確にいうとそれはどういうことなのでしょうか。

セフェリス

私はギリシアは一つの連続的な（進展の）過程<プロセス>（*μὴ ἀδιάκοπη ἐξελικτικὴ διαδικασία*）⁽⁴⁾であるといいたかったのです。英語では「古代ギリシア」という表現は、「完結したもの」（*τοῦ «τελειωμένου»*）という意味を含んでいますが、私どもにとっては、ギリシアは、どのような運命になろうと末長く生き続けている；生存しているのです。まだ息絶えてはいないのです。これが事実です。古代ギリシア語の発音を論ずる際にも、同じ論法が可能ですが、アメリカやイギリスやフランスの学者たちはエラスムスの発音を採用する点で多分まったく正しいといえる知れませんが。彼らにとってギリシア語は死語（*νεκρὴ γλῶσσα*）なのです。しかし私たちにとっては話は別です。すなわち事の真相は、あなたがたは、古代ギリシア語はある時点でその機能を終熄した、と考えているわけです。そしてこのことが一残念なことですが一恣意的な方法で（*μὲ τρόπο αὐθαίρετο*）発音することを、あなたがたに可能にしているのです。

キーリィ

それではあなたはギリシア語の伝統も他の事柄と同様、一つの連続したプロセスであるとはっきりお認めになるわけですね。それはこの国の古典およ

びビザンツ学者たちのある人々の信念とは違いますね。そして他の国々の人々（の考え）とも（違う）と思うのですが。

セフェリス

どうしてそんなことが起るのかご存知ですね。この主題、ギリシアの歴史は非常に広大なので、個々の学者は、ある特定の時代、または専門に自らを限定していますし、（彼らにとっては）その（専門領域の）外側には何も存在しないからです。例えばギボン、一千年にわたる生命体は衰退（の道すじ）であった、と考えました。一つの国民がどうして一千年もの間衰退の中にあることができましょうか。いずれにせよホメロスの詩とキリストの生誕との間にはそこそこ八百年がたっています。とすれば思うに衰退の一千年があったということになります。

キーリィ

ギリシアの詩人のその伝統に対する関係を問う場合、ギリシアの詩人は、ギリシア神話や時にはギリシアの風景さえも利用するアングロサクソン系の詩人たちに対して優位に立っているといつも私には思えてきたのです。何年か前にカヴァフィスとセフェリスの詩における英詩の影響を考察する論文を執筆していた時のことを思い出します。私はあなたの国の風景に現れるイメージについて、あなたにおたずねしました。例えば、あなたの作品に現れる彫像のシンボリックな意味についてです。あなたは私の方を向いていました。「でもあれは本当の彫像だったのですよ。私が実際に目にしたある風景の中に存在したものなのです。」あなたがその時、いわんとしていたと思うのは、あなたは、つねに生活の事実、現実の情景から始めたのだということ、そこから、そこに含意されるかも知れない普遍的な意味に向ったということなのです。

セフェリス

過日ある英国の学者が、古典時代の彫刻のある専門家の（著書から）例証を挙げて説明しました。彼はパルテノンの彫刻について講義をしていたのです。講義のあとで私が彼のところに祝辞を述べに上っていくと、彼はいいました。私の記憶では、「あなたには私がいわんとしたことを表現する詩句がありますね。『彫像は遺物ではない。－遺物は私たちなのだ。』」といったのです。私がいいたいのは、彼ほどの学者が、要点を説明するのに私の（詩句の）一行を使ったということに驚いたということなのです。

詩人が幼年時代に獲得する心像は以前に私たちが論じた事があります。あなたは、かつて、平均的な英国人とあなた自身を、フットボールと車が彼らにとって果すかも知れないことを、ロバがあなたのために果した、ということを示唆することによって、区別したことがあります。またあなたが海やスマイルナに近いあなたの生まれた村の船乗りたちについて話したことを記憶しています。

§ 3. セフェリスにとっての伝統の意味

以上のセフェリスの主張は、集約すると3点になろう。まず第一にギリシアは古代において「完結」したわけではなく、連続的な展開のプロセスである。そして筆者の補足をもってすればこのプロセスの総体をGreekdomと呼ぶことができよう。2) したがって、歴史家ギボンのいうごとく、古典古代を頂点として—ギボンにとっては特に古代ローマが問題であろうけれど—あとは衰退の一途をたどる“decline”の歴史ではない。3) 古典ギリシア語の発音についてもこのことはいえる。西欧で行われている恣意的に切断されたある時期のErasmic⁽⁵⁾に復元された発音を真正のギリシア人は用いていない。この3点について西欧人(あるいは、私たち日本人を含めて非ギリシア人)たちは、セフェリスとは対立しているわけである。この違いはいったいどこから来るのだろうか。結論からいうと、セフェリスは自国史の立場から観ているのであり、非ギリシア人たる西欧人や私たちは、世界史に登場する政治・文明史的観点からのいわば主役史の立場からみているといえるだろう。たしかに、クレタ・ミュケーナイ時代から古典古代をへて、ヘレニズム世界にいたるギリシアは文明と文化において華々しい達成を示している。そのような「主役史」の立場からみれば、ギリシアはローマに引き継がれ、やがてビザンツをへてトルコの支配下に入り、独立して今日に到ったが、古典古代の栄光は遠い過去のことである。第一次世界大戦のメガリ・イデ(大ギリシア主義)の理想もケマル・アタチュルクのトルコに破られ、以後第二次世界大戦後半のナチの占領、解放後の内線をへて今日に到る状況は周知のごとくである。が、自国史として、ギリシア人の観点からみるならば、たしかに古代ギリシアは「finished」してしまったわけではない。また、一千年もの間、一つの民族、一つの言語が衰退し続けるという「decline」の思想もたしかにおかしなことである。ギリシア自体が、その時その時に応じて、国制を変え、文化を変容し、宗教を変えて連綿と続いてきた。様々の艱難の時代を通じて、ギリシア民族もギリシア語もアイデンティティを保ちつつ現代に至っ

ている。文学作品にしても、中世、ビザンツ時代あるいは、それ以降の各時代にギリシア各地で多様で素晴らしい華を咲かせているのではないか。驚くべきアイデンティティを示しているのではないか⁽⁶⁾。言語の発音にしても、言語学的に復元されたある意味で仮構の古代的発音によるのではなく、現在生きているギリシア語の発音で発音するのがギリシア人というものであろう。ちょうど私たちが万葉集を現代日本語の発音で読むように、である。最後の彫像をめぐるギリシア人セフェリスと非ギリシア人キーリィの対話も含蓄があっておもしろい。

§ 4. アレクサンドリア人カヴァフィスにおける「ギリシア」⁽⁷⁾

ところでセフェリスとは多少ニュアンスを異にするかも知れないが、アレクサンドリア人カヴァフィスはまさにこのような連続したプロセスの中にあるギリシア人の歴史意識を体現した詩人といえよう。彼の作品中には、ホメロスの英雄たち、ギリシア神話の神々、悲劇の主役たちはもとより、プトレマイオス朝の王や王子、ローマ皇帝、ビザンツの皇帝や女后そしてユダヤの伝説上の人物、下っては現代のアレクサンドリアの市井に現れる神々の如く美しく愛らしい青年にいたるまでが何の違和感もなく混在している。彼の作風もまたセフェリスがしばしば口にし、筆者も指摘したことがあるように、ギリシア詞華集のエピグラムの伝統上のものである。もっともセフェリスが歴史、神話詩人カヴァフィスの詩「アカイア同盟のために闘った戦士に」(1922)の内に織込まれたスミルナの悲劇を頂点とするギリシアの運命のアリュージョンを読み取り、彼を、現代を見すえた現代詩人として認知するにいたる過程は、周知のことである⁽⁸⁾。

もっともカヴァフィスにとっての「ギリシア」はセフェリスよりもやや広義のものであったようである。E.M.フォースターは、

「過去に対する彼の構えには彼の同時代人のこころをくすぐるものはなかったし、現在も彼のような構えは一般的ではない。彼には、ギリシアに対する忠誠心はあったが、彼のいう「ギリシア」とは地理的な一地域の意味ではない。それは、彼の所属する人種から幾千年かの間に四方八方に流れ出た磁気力のことである。この力は(アレクサンドロス大王以降は)非ギリシヤ的なものとの混交をまったくいとわなかった。実際進んで混交しようと求めたくらいである。ビザンツ文化を持続させた力とはこれである。人種純血主義は彼にヘドを吐く思いをさせるものであった。政治上の理想主義またしかり。彼が海の向う側の小半島国ギリシアのまなじりを決した民族主義にかなり辛らつな感情を抱く時があったとしても私は驚かない。

「ギリシアの貴族社会ですって?!」と彼はある時すっとんきょうな声を出した。「あの国で貴族だってことはですね、まあ一八四九年の時点でアテネの外港ピレウスのカフェに専用席を一つ持っていた家というほどのことです」。彼の重視する文明は一種の混血文明であり、ギリシア系はその中で一頭地を抜いていさえすればよい。このルツボの中に外部から人がなだれこんで、これを変えては自分も変えられるということを長年繰り返してきたわけである。(97)

としている。カヴァフィスがかつて筆者が規定したように「ヘレニズム以来のコスモポリタンの系譜に属するギリシア系の人間⁽¹⁰⁾」ヘレニズム的コスモポリテスの系譜上の詩人といえよう。筆者が前述の論文で、カヴァフィスがギリシア詞華集から咲き出たエピグラム詩人であるとした時感じた一種の新発見にも似た感覚は、まさにセフェリスが主張している連続したプロセスに気付いたという点、ギリシア詞華集もまた「完結した」わけではなく、現代に息づいているという認識にいたったという点にあったのである。関本至先生からこの論文に対して新しい認識がえられたというご感想をいただいたことに当時大きな力強い支持をえたような感激を覚えたことを記憶している。

§ 5. 結語

セフェリスがこのキーリィとの対話においてつきつけた古代ギリシア観は抜きがたく私たちにも残っているわけであるが、近來のビザンツ学、中世史の発展や現代ギリシア文化、現代ギリシア語の紹介、研究が徐々に深化し、層が厚くなり充実してきている状況は、ギリシアを連続したプロセスの総体として理解しようとするセフェリス的視点が日本にも認識され始めている徴候かも知れない。大学や大出版社の間に停滞している神話、悲劇、哲学 etc. のみが「ギリシア」であるというステロタイプなギリシア観はそろそろ脱却して、トータルな、いわばGreekdomの各時代各文化とその狭間に咲く文学、芸術をその即自態において捉えなおす必要があるのではないだろうか。そしてこのような視点、いわば現代ギリシアのセフェリス的視座から、ギリシア全体を過不足ない連続のプロセスとして把握する、また、しうる位置にるのが、現代ギリシア語・文学・文化に親しみ研究している私たちではないだろうか。

注

(1) Edmund Keeley, ΣΤΖΗΤΗΣΗ ΜΕ ΤΟΝ ΓΙΩΡΓΟ ΣΕΦΕΡΗ, ΜΕΤΑΦΡΑΣΗ: ΔΙΚΑ

ΚΑΣΔΑΓΑΗ (A Conversation with George Seferis) ΑΓΡΑ-ΑΘΗΝΑ, 1982.

- (2) 志田信男「セフェリスのこと」、セフェリス詩集、世界現代詩文庫、土曜美術社、1988、p.120ff.参照。
- (3) 前掲書、pp.20-26。
- (4) 英訳では a continuous process であるが、ギリシア語では ἐξελικτική、進展の、evolutionary が付いている。evolutionary はここでは、進化という価値判断を含まない時間上の進展というような意味であろう。英訳 a continuous process はこの観点からなされたと考えられる。
- (5) The Erasmic pronunciation (τὴν ἐρασματικὴν προφορά) は、人文主義の時代に学問的（学者的）に再構された発音、ほどの意味にとってよからう。
- (6) カイモン・フライアーはこのアイデンティティに関して、述べている。
「しかしながら、この恐るべき外国の住民による征服、搾取、殺到などについて詳述する私の目的は、これらの幾世紀にもわたる長期間を通して、ギリシア的特性は奇蹟的にその原初的な活力を保持してきたこと、さらに現代ギリシア語がいぜんとして古典ギリシア語の直系の相続人であるということ強調することである。私は少なくとも、西半球において、このような圧倒的なハンディキャップの下で、このようなアイデンティティと統合性をもった国家を他に知らないのである。」まさに同感である。
(Kimon Friar, Modern Greek Poetry, 1982, Athens, p.16)
- (7) 拙稿「アレキサンドリア人<びと>カヴァフィスーギリシア詩華集から咲き出た孤独の現代詩人」、詩と思想、1989、9月号、土曜美術社、p.76ff.参照。
- (8) George Seferis, On The Greek Style, Athens, 1966 所収, Cavafy And Eliot - A Comparison, 2, p.125ff.参照。
- (9) 中井久夫訳、カヴァフィス全詩集、みすず書房、1988 所収、E.M.フォースター、「カヴァフィス全詩集」p.398。
- (10) 注(7)、拙稿 p.77。

[後記] 参考文献は注の中に詳記したので特に書き出すことはしない。